

対談に見る司馬遼太郎(2) — 対談集『日本人を考える』を中心に —

A study on Ryotaro Shiba through the dialogue (2)

全 彰煥

Changhwan John

【Abstract】

Summarizing the views of Shiba in this publication is as follows. For the Japanese and Japanese society, ① Traditionally Japan is “Good convection in the society” and “No classes society”. ② Japanese is “Absent-minded people” of flexibility that is not tied to a particular thought. ③ Japanese has a risk of “Mass hysteria symptoms”. So, do not trust our own national upsurge. ④ We should intend to a flexible society also willing to “assimilation to multiculturalism” and “nonresistance pacifism”. ⑤ Japan has the duality of the “Principal” and “Practice”. And other 10 points. For the history and international relations, ① Edo period was a unique period that was the era of the peak of the Japanese civilization in terms of the “Beauty of order”, and the only example of the history of the world that controlled civilization. ② Shiba likes the ideological toxins of Nobunaga Oda, there is a modern element to his political innovation. ③ Traditionally Japan was also poor diplomacy and insensitive in international affairs. The Pacific War is one of the examples. And other 4 points. For the ideas・ideologies, ① The ideas are a fiction, the life is about three-four decades. For Buddhism・Confucianism, ① Since Buddhism is introduced as a form of art rather than the life of religion and philosophy, there is a difference between Japan and Southeast Asian countries. ② The monotheism is not suited to the Japanese, also feel uncomfortable. ③ From the beginning, Monk Kukai had a focus on and introduced the mantra esoteric of China. Then he reorganized it in Japan. And other 2 points. For human beings, ① The human is stupid so they would commit suicide with human civilization. ② Destruction of the human race is unavoidable. ③ There is not correct guidance law for Japanese, who is flexibly to changes and absent-minded, must rely on God. ④ Because modern democracy is applied to the battery exhaustion, new furious idea is desired by the great ruler.

Key words : Ryotaro Shiba, 『Think about the Japanese』, Dialogue of Ryotaro Shiba

1. はじめに

論者は、司馬遼太郎研究の一環として三篇の紀行文 — 「『韓のくに紀行』に見る司馬遼太郎の韓国認識」、「『耽羅紀行』に見る司馬遼太郎の韓国認識」、「『壱岐・対馬の道』に見る司馬遼太郎の朝鮮観」 — を通して彼の独特な歴史観と両極端の評価を取り上げたことがある。そして、歴史小説家司馬遼太郎に関する人間的側面の調査・分析に取り組みたいと思うようになって、数多く残されている対談集に注目したわけである。因みに韓国の場合、

著名なドナルド・キーン氏との対談集『日本人と日本文化』以外の対談集研究はほとんど行われていない。

本論は、すでに行われた司馬遼太郎対談集研究「対談に見る司馬遼太郎(1) — 対談集『日本人と日本文化』『日本人への遺言』に見る司馬遼太郎と司馬史観批判論 — 」に続く2回目の研究である。論者は、司馬に関する研究は歴史観と思想観だけが過度に取り扱われる傾向がある — 特に、韓国の場合 — と思う立場で、小説家としての作品性について再認識しなければならないと思っている。

従ってここでは、司馬作品の根本要素にもなれる現実観と人生観を、対談の発言の内容を中心に探ってみることにする。

2. 対談集『日本人を考える』論

2.1 日本は“無思想時代”の先兵

— 1969年11月 <梅棹忠夫×司馬遼太郎>

階級がまったくありませんでしょう。
(中略) 人間が社会というものをもって以来、初めて無階級状態を日本において経験するのですから。 <p. 10>

日本というのは歴史的に見ても、非常に社会的な対流のいい国ですね。絶対的な支配階級もないし、下積みでどうにもならないといった階級もない。なんとかなる国なんですね。 <p. 12>

上記の引用から、司馬は戦後の日本を無階層社会組織として把握していて、その典型をアメリカから求めているのが解る。特に、当時1970年代の日本社会を「無層社会への進化の面では世界の先兵」であり、「社会的対流のいい国」だと言っている所はおもしろい。まずは、日本社会を「無層社会」と見ていいのかという点と、果たして「社会的対流のいい」組織であったのかということを挙げざるを得ない。「無層社会」において「社会的対流」が出来るか出来ないかは別に、この二つは不可分の関係であると思われる見地から見た場合、日本社会は身分制度に徹底し、組織間の移動もままならぬことだったと見なされるのが一般論であると論者は認識している。因みに、閉鎖的だった社会の雰囲気の中で、ある程度の「社会的対流」はあったと認めるとしても、近・現代以前の日本社会を「無層社会」であったと断言する司馬の意見には、相当な違和感を覚える。果たして、絶対的な支配階級がなかったのか。

反面、現代の「無層社会」現象は日本だけではなく、資本主義市場経済体制を堅持していた国々の共通の問題でもあったと思われる。そして、当時、高度経済成長の軌道に乗っていた日本がその先端に立っていたという指摘は適切であるし、

それは昨今の日本社会にも繋がっていると言えるだろう。

ときどき日本人をはるかな昔の遊牧民と結び付けて考えてみたくなる。

<p. 14>

何事にも自己規制こそ極意だというような考え方が日本人には以前からあって、それに儒教がのっかったために、どこか堅苦しい道のようなものになっていったんじゃないかと思うんです。

<p. 16>

日本民族の系統論について司馬ははっきりと表明していないが、騎馬民族説にかなり関心をもっていたらしく、引用の「遊牧民」云々もその一面と見られる。ただ、日本人はいくつかのルートを経由した混血であると言及したこともある。¹⁾ので、彼の遊牧民説は一部分としてうけいなければならないだろう。引用の儒学の硬直性に関する指摘と日本も(中国、朝鮮を含めて)その悪影響を受けたという自述は、当時も一貫しているのが分かる。

日本人と思想の関係ですが、たとえば仏教が伝来したとき、聖徳太子という人はおそらく仏教を思想として理解して受け入れたのではなく、一種の芸術的ショックにやられたんじゃないか。

<p. 17>

思想というのは倫理的に完璧でなければいけないわけで、しかしそれは不可能だから、あらゆる思想はフィクションということになりますね。 <p. 18>

上記の引用で、日本は仏教を宗教と思想ではなくて芸術の形として受け入れたと言っているが、ほぼ同じ時期に刊行されたドナルド・キーン氏との対談でも同趣旨の意見を取り上げている。²⁾ここで司馬は、ある講演会で、導入初期の仏教は「インテリのあいだの遊びにすぎなかった」とまで言ったことがあると自述している。さらに、生活規範としてまで定着した東南アジア諸国の仏教と日本の仏教とは食い違いがあると線を引いてい

る。

また、思想というのはフィクションで不完全なものなんだから、狂気をもたらしてしまいがちで中毒性が内在していると把握しているのが分かる。

日本の場合は、徳川時代がまったく異例でしたね。徳川家一つを守るために日本人全部に等級をつけた社会で、上にも下にもいけない。そのために三百年間の平和が保てたわけで……。<p. 20>

ですから、明治から終戦までの天皇制というのは、朱子学の影響を受けたフィクションでしょう。<pp. 20-21>

論者は先行研究を通して、司馬の好きな時代を、①古代(上代)日本、②東山文化期、③戦国時代、④江戸初期、④明るい明治期としてまとめたことがある。³⁾ 本書でも司馬は、江戸時代全般に対してネガティブに見ていて、さらに、江戸時代は日本歴史上特別で特異な時期だと見なしているのが分かる。いくら江戸時代が特異な時代ではあったとしても、「日本人全部に等級をつけた社会」であって「上にも下にもいけない」時代であったと言っているのと、上記の「無層社会」「対流のいい」日本社会とは真っ向からぶつかっている。これは、司馬の独特な「時代の細分化」⁴⁾ — 「明るい明治と暗い昭和」とか — を理解するのに重要なもう一つの例として挙げられると思う。江戸時代を除いて日本は無層社会だったというのをどのように受け止めるべきか、外国人としては難渋な問題であるのが率直な気持ちである。

<pp. 20-21>の引用では、ある特定の思想に縛られてない日本人だからこそ時代の変化にすぐ適応していると言っている。そして、1970年代の日本人の姿を彼の好きな室町時代に例えているのが分かる。

戦争をしかけられたらどうするか。すぐに降伏すればいいんです。(中略)それより無抵抗で、ハイ持てるだけ持っていてください、といえるぐらいの生産力を持っていればすむことでしょう。向うが占領して住みついたら、これに同化しちゃえば

いい。それくらい柔軟な社会をつくること
が、われわれの社会の目的じゃないですか。

<pp. 29-30>

ここでは、司馬の現実認識の究極な面を示している。「無抵抗平和主義」と「多文化への同化」までも厭わない社会の柔軟性を強調しているのは、彼の非現実的、理想主義的一面を表わしていると判断される。例えば、経済評論家である田中直毅氏との対談では、「私は日本の土地は共有にすべきだと思うようになりました」⁵⁾ と言ったこともあって、他にも彼の理想主義性向を仄めかす所はいくつもある。

2.2 “あつけらん民族”の強さ

— 1969年12月 <犬養道子×司馬遼太郎>

日本はまわりが海だから、頭から単一民族だと思っている。(中略)だから世界連邦なんていうのは、日本の特産物でしょう。<p. 37>

どうもカトリックとかユダヤ教とかいう一神教がわからない。(中略)絶対的な随順感覚がよくわからない。

<p. 38>

相対的思考法の国です。ですから私自身、絶対的なものを信じている人には異邦人を感じてしまう。<p. 38>

「頭から単一民族」というのは、司馬が述べてきた後の資料を参考とした場合、血統的・人種的単一民族の意味ではないと考えられる。もし、日本人が血統的・人種的に単一民族だという意味ならば、彼の考え方が後から変わったこととなる。<p. 38>では、一神教に対する拒否感を示しているが、他の所では、一神教はそもそも日本人に合わない宗教だと断言したこともある。つまり、日本は伝統的に「万の神」の多神 — 神道 — の国なんだから、この特色によって思想的にも柔軟な「相対的思考法の国」になったと見ているのが分かる。さらに、「絶対的唯一神の信奉者には異邦人を感じてしまう」と言った所は40代司馬の新たな一面であると思われる。

日本人というのは、絶対権力・権威を一つのものに考えるのを嫌がるんですな。

(中略) 絶対的な権力をもった最終の責任者というのがない。(中略) つまり絶対権力というのは日本では力学的に心理的に安定を欠くんです。

<pp. 40-41>

日本歴史上、天皇が実権を行使したのは長くなく象徴的存在であったのはよく知られているものの、外国人の目線でいえば、天皇が最終責任者ではないということは、どうしても納得し難い。それでも、司馬が言っている「多神教的神道 → 相対的思考 → 一人集中絶対権力への根強い反感」といった道筋はつじつまが合わないとは言えない。かえって、二つ以上に分散された権力を基に組織の意見のバランスをとっている日本の特質をよくも見抜いていると考えられる。

だいたい太平洋戦争のボタンを押したのが誰なのか。いまだにわからない。今後もわからんでしょう。こんな不思議な国ってないですよ。<p. 43>

絶対権力を持った最終責任者がいないから、太平洋戦争の責任者も探せないし、最初からいなかったことにまでなれる。この点を司馬も不思議に思っている。ちなみに、司馬はこれについて、日本社会のマス・ヒステリー (mass hysteria) 現象の危険性を一般人が自覚しても、牢固な組織の相対性の世界に囲まれているからどうしようもなくなる、それが日本の特徴でもあると述べている。

日本という国は不思議なところで、そういうものができてせいぜい三、四十年ぐらいで電池がきれちゃうんですよ。<p. 47>

つまり日本人には、どうしようもなくあっけらかんところがある。

<p. 48>

司馬は、「古い伝統」を作るのに大体 10 年間ぐらいかかるというドナルド・キーン氏の意見に同意したことがある。⁶⁾ 本対談では、「思想」と「イデオロギー」の生命力は 3、40 年ぐらいだと何度

も言っているのが分かる。ただ、司馬とキーン氏が触れた「10 年間」というのは外国を含めての話であって、ここで言っている「3、40 年」は日本だけのことである。すなわち、仏教を除いて儒学、キリスト教、マルクシズム等が日本では長持ちできなかったが、その原因は、原理 (プリンシプル) に拘らない、縛られない日本人の特性のためだと言っている。特に、儒学の影響は支配層 (読書階級) には強かったが一般庶民にまで広まったのは江戸時代に入ってからであって、それも儒学本来の原理は希釈・変質した形であったと言っている。さらに、前述したように、仏教も流入の当初から原理中心の宗教として定着したわけではないと言っている。この点は、キーン氏との対談において一番顕著な食い違う所であるが、司馬の文化観、思想観、歴史観を理解するにあたって大事なポイントであると論者は考える。

つまり、引用で言っている「あっけらかん日本人」は、司馬の論理によると、思想的原理に縛られないからの結果であると言える。

私は非武装論者なんです。(中略) ということで私の非武装論はドウドウめぐりしてついには行き詰ってしまう。

<pp. 50-51>

前に、戦争を仕掛けられたらすぐに降伏すればいいと言って柔軟な社会作りを呼びかけたが、同じ脈絡で自分は非武装論者であると言っている。しかし、その非現実性も認めているのが分かる。

明治以後の国内騒乱は、みんな外交問題ばかりですね。(中略) だから私は、日本の国民的盛り上がりなんていうのは、もう信用しなくなっちゃっている。

<pp. 52-53>

だから私なんか、本当の意味の愛国者だと思っているから、騒がないわけです。よほどの知恵を出さないとこの国のカジはとれない、という感じがあるから。<p. 53>

「暗い明治期」の日本について集団ヒステリーの狂乱であったと述べたことがあるが、ここでも

日本人の盲目的集団行動について警鐘を鳴らしている。また、当時のファナティシズムの騒ぎや安保反対運動を知恵のない軽率な騒ぎだと批判している。

だから日本民族の相対的思考体質は、案外われわれを救っているのかもしれないなあ。 <p. 54>

朝鮮人というのは政治的論理をつくることではすぐれた能力をもっています。つまり、建て前主義になる。だから日本人のようにクルクルは変らないし、変れない。 <p. 55>

日本は相対的思考体質のため歴史的に救われたかも知れないし、これは政治的論理に縛られがちな朝鮮とは違うと言っている。司馬は朝鮮半島の観念的政治歴史について、紀行文と他の対談集で、批判的見地から触れたことがある。⁷⁾ しかし、「建て前主義」と表したのは本書が初めてである。一般的に言えば、朝鮮は儒学が儒教になる課程の中で、統治理念と政治理論の「大義名分」を大事にするとは言っているが、それを「建て前」とは言っていない。逆に、韓国人（朝鮮人）は日本人を評するときに、「本音」と「建て前」があるから、よくわからないと言っている。

日本人の最大の発明は天皇ですよ。皇帝でもなければ王様でもない。なんかつかまえてどこもない存在でしょう。明治以後八十年の天皇は別ですよ。

<p. 55>

天皇の存在意味に関する賛否両論について、司馬ははっきりと言ったことはないが、ここの言及を鑑みた場合、日本の伝統文化の象徴的意味合いとして欠かせない要素であって、日本最大の発明品でもあると認識しているのが分かる。そして、彼独自の「歴史細分化」を持って、明治以後八十年間の天皇は別のものだったと言っている。果たして、何千年の天皇の歴史から八十年間を切り離して言えるのかについては、「明るい明治と暗い昭和」を批判した中村政則氏と中塚明氏の司馬史観批判論を挙げたい。さらに論者は、八十年間の天

皇の存在の価値と意味が変わったわけではなく、狭意の政治家、広意の権力層が天皇制を悪用したと考えている。

2.3 西洋が東洋に学ぶ時代

― 1970 年 1 月 <梅原 猛×司馬遼太郎>

そのチャンスを生かすためには、既成の仏教団にここで一度、店を閉めてもらわないといけません。たとえば私、どう考えてみても禅というのは天才のための道だと思うんです。 <p. 65>

同じ時期に書かれた『韓のくに紀行』で当時の神道は変質してしまったもので、古代の神道とは違うと言ったことがある。ここでは、当時の仏教に対しても非難しているのが分かる。後から触れられるのだが、日本的な仏教として定着したのは日蓮宗で、それは「禅」を中心とするいわば「大乘仏教」とは別のものだと言っている。原理に縛られるのに苦手な日本人の立場としては「禅」も苦手だろうという等式は分かりやすい。さらには、テレビに出る坊さんは品がないと蔑んだり、金閣寺とか銀閣寺は歴史的建造物で国民の共有財産なのに住職さんにお金を取られるのは可笑しいことで、当時の文化財保護法を非難している。また、新しい原理を提案する宝庫として、仏教は檀家制や世襲制をやめて解放されるべきだと積極的に批判している。この点は、土地共有制度まで言及したことのある司馬の目線では当たり前の意見だと思われる。

私は織田信長という一個の思想的毒物が好きで、好きなあまり、小説にもうまくかけず、座談でもうまくしゃべれません。しかし彼の無神論というのは、世界史上希有なことですな。 <p. 70>

信長の好きな理由として「思想的毒素」を挙げている。どうしても司馬は、時代も人物も平凡ではないのに関心があったようで、この点は論者が対談集の研究を通して突き止めようとする彼の現実認識と係わっていると思われる。さらには、信長の革新的政治は当時としては近代を開こうとし

たことに当たると評している。

たしかにあれは儒教の合理主義のおかげですね。(中略) そういう豊臣期の処世訓的な儒者が、徳川時代に入って朱子学という合理主義になっていく。

<pp. 72-73>

儒学の長所についてはほとんど触れてないが、ここでは儒学の合理性のいい影響の例を取り上げていて、福沢諭吉も儒教的鍛錬があってこそ近代化に貢献できたと指摘している。

ふしぎなことに日本の各時代をにぎわす新興宗教というのが、多くは日蓮宗から出ていますね。<p. 78>

どうも日蓮宗というのは日本人の縄文的体質というか — これを言い出したのは谷川徹三ですけれども — 荒々しい土着エネルギーを触発するようなところがあるのかもしれない。

<p. 79>

日蓮宗は古代日本人の活発さを煽りだす力があるようだと評しながら、一派である創価学会はもう仏教の境地を超えていると言っている。当時の創価学会は発展一途にあったようだが、司馬は前述のとおり、日本での思想やイデオロギーは3, 40年で生命力が尽きるといった見地で創価学会の廃れを予言している。昨今の創価学会について論者は分からないのだが、もしかして当たっているのではないかと試してみる。

2.4 日本の繁栄を脅かすもの

— 1970年2月 <向坊 隆×司馬遼太郎>

日本の歴史というのはある意味では縄文式のころから、飢えるかもしれないという恐怖心の歴史です。(中略) 飢餓への恐怖心が宗教やイデオロギーを生んでいく。 <pp. 89-90>

司馬は戦後の経済発展による豊かさが日本歴史上初めてのことで、現代以前までの貧乏さについて仕切りに触れたことがあるし、ここでも同じ旨

のことを言っている。特に、当時の若者に物質的豊かさによる緊張感のないもろさやアメリカと旧ソ連の両極体制に挟まれている日本の立場と斜陽の危機に直面しているイギリスに対して同質感を感じているのが目立つ。さらに、人間の宗教とイデオロギーは飢餓の恐怖感から生じるものだというのが分かる。

ところで例の核拡散防止条約ですが、(中略) まるでこっただけカードをひろげてトランプをやるようなもので、これじゃいつまでたっても勝てっこない。こんな一方的なバカげた話もないと思うんですが。

<pp. 100-101>

冷戦時代の「核拡散防止条約」は勝ち組の一方的なバカげた話であると突っぱねて一蹴している。付け加えて、日本は、経済の死活問題でもある安くていいエネルギー確保の次元で独自の路線が欠かせないと呼び掛けながら、応用科学者である対談相手の向坊氏に、「いい意味でのナショナリスト」になってもらいたいと褒め称えている。

2.5 政治に“教科書”はない

— 1970年4月 <高坂正堯×司馬遼太郎>

無知こそ行動のエネルギーであるという精神は、わりあい幕末からありますね。

(中略) たとえば幕末の攘夷論がそれですね。 <p. 116>

高坂氏は、日本は国際情勢への無知だけではなく国際情勢の認識を拒否する傾向までであると言っているが、これに対して司馬は、その「無知」は幕末の時代からあったものでそれが国民的「エネルギー」となって歪な「攘夷論」を生んだと言っている。そして、日本国民はさんざんに利用される結果となったと主張し、幕末の攘夷論について否定的立場を示している。⁸⁾

それにだいたい日本人というのは国外亡命を考えられないたちの民族なんです。 <pp. 119-120>

室町末期の倭寇を考えてみても、せっ

かく激しい戦闘をやって中国や台湾沿岸を占領しても、そこに住み着かず日本にかえっちゃう。民族性ですな。

<p. 129>

依然として、日本人の閉鎖性について触れている。倭寇の非定着侵略傾向については本書だけではなく『日本と日本文化』でも触れたことがあるが、⁹⁾ それは鈍感な国際感覚と国際情勢への認識不足の結果によるものであって、別の極端的な例が太平洋戦争だと指摘している。つまり、太平洋戦争も国際情勢を無視した戦争だったということで、これは彼の首尾一貫した主張でもある。

そういう時代時代の政治情勢下での口封じのフレーズをあつめてゆくだけで、日本人の意識史が編めそうです。いまは安保是認論者というだけで、インテリの位置から失格しちゃうような気分がありますな。

官僚はいたけれども、政治家はいなかった。

当時の「安保是認論」は、1960年1月改正された「新日米安全保障条約」が10年間の時効を迎えて起きた時効延長問題を巡っての賛否両論のことである。司馬はこの論争に対して直接的意思表明をしていない。ただ、当時政治家らの力量不足を指摘しながら、日本歴史上の典型的政治家として大久保利通を挙げている。¹⁰⁾ 薩摩と共に幕末政治の一軸であった長州人は固定観念の強いイデオロギストだったが、薩摩人はわりと儒学の影響の薄い教育のためか柔軟な頭の所有者だったと見なしている。ここで注目すべき所は、大久保の「陰謀政治」を肯定的に評価した点と、これは儒学の影響の薄い教育を受けたためである可能性を取り上げている点である。すなわち、政治の陰謀性を認めていることと、儒学に対する根強い批判的視覚が改めて分かる所である。

とにかく日本では建て前と内実がちがうでしょう。これは野党にも自民党にも官僚にもいえる。ややこしい国なんですな。この建て前と内実の別は、儒教からきたも

のでしょうね。

教科書がダメになって、みんな無学です。ね。信長なんかやっと字が書ける程度ですし、秀吉はもっとひどい。

<p. 135>

要するに、政治に教科書はない、人生に教科書はない……そこから出発せんといかんということですな。

日本人には「建て前」と「内実」があると述べているが、引用(24)で朝鮮人は「建て前主義」だと言った実情が分かる所である。即ち、日本は思想にも政治観念にも柔軟性がある反面、朝鮮はそれがなく硬いということである。また、当時の教育は結果だけを重視しすぎているという高坂氏の意見を受けて、司馬は「教科書のダメな無学の時代」だと同意しながら、江戸時代以来の儒学(朱子学)や道学をもつての教科書教育に否定的反応を示している。さらには、坂本竜馬の場合、道徳学(政治学を含めて)である朱子学なんかの儒学的束縛から逃れ出た人だから「無学者」だとある講演会で触れたこともあると自述している。そうすると、当時の無学はより思想的に自由で頭の柔軟な人材を輩出する可能性が高くなるということになるのだが、どうもそこまで見据えて述べたこととは思えない。

前半で司馬は、変化無窮な日本人の望ましい舵取り方について具体的対応策は見当たらないから神に頼るしかないと述べたが、政治と教育の問題においても正解はないと言っているのが分かる。政治にも人生にも教科書はないと。

2.6 若者が集団脱走する時代

― 1970年8月 <辻 悟×司馬遼太郎>

若い人、とくに不満を尖鋭化させた若い人の仲間というのは、一緒に共同幻想を持てる人たちなんですな。(中略) 共同幻想と細分化は、下可分のものですね。

<p. 145>

司馬は、この時期の政治家は戦前の政治の動脈硬化した部分を引き継いだところがあるし、社会齢というのもやはり30年ぐらいで滞りがちで、戦

後はより早まっていると診断している。特に、当時の学生運動を主導している若手の連中を共同幻想に駆られて排他的に細分化していると分析している。論者は、司馬の歴史時代分別法を「時代細分化」と名付けて具体的要素を探っているが、ここで言っている「共同幻想の細分化」との直接的係わりはいまだに言えないものの、言葉の類似性に驚かされる。例え、歴史的時代観にも幻想があり得るなら、彼の時代細分化と関係づける何等かの可能性があるわけだから。

政府の中の権力をかきわけてみると判らなくなる。権力そのものが造形的なものでなくて、悪液質をもった液体になっている感じがありますね。 <p. 156>

われわれは旧秩序の中のどこかに精神の基盤を置いてますから、何となく精神の安泰を得ておりますけれども、若い連中は変な社会の実験動物みたいになっていきますね。(中略) つまり違うモラルとか、価値観とか、秩序感覚とかがリアリティの骨組みになった人間がでてくるんじゃないでしょうか。 <p. 161>

いまは特効薬など期待せずに、社会は苦しみに苦しんだほうがいいのかもかもしれませんね。 <p. 162>

司馬は、現代の政治権力自体が政府のどこにあるのか解らないと言い、政治自体が目に見えない液体のようなものになってしまったと認識している。従って、このような無階級社会、正体のない液体化した政治権力社会のなかで、今の若者は個別に目標を持たざるを得ない希有の時代に置かれていると分析している。その内、新世代の新しい人間像の登場を期待するだけで、社会病理現象に対する対策は依然として取り出していない。

2.7 日本人は“臨戦体制”民族

— 1970年9月 <陳 舜臣×司馬遼太郎>

要するに空海は、海の向うに存在しているものを持ちこんでくるのに、そのエッセンスを抽出して、日本で再編成して、た

とえ小粒であっても、完璧な結晶体にして高野山の山頂へ置いた。日本文化は、そういう思考で成立しているとは思いませんか。 <p. 169>

日本人と中国人の関係ですが、昔から日本は、中国の現実を理解するという関心の示し方をせず、むしろそのある部分を理想化し、尊敬しつ放しでできたわけですね。

(中略) 日本人にとってヘタに中国を理解しようと思う姿勢をとらないでいる方がかえって便利のように思えてきますよ。 <p. 170>

中国人のほうが現実的なくせに、反面、民族共通の一理念に対してひどく忠実なものではないか、ということです。 <p. 171>

仏教の導入において空海は、中国の合理主義には関心がなく最初から真言密教に着眼して持ってきて、そのエッセンスだけを抽出して日本式に再編成したと言っている。そして、前述のとおり、日本式に再編成された真言宗から日蓮宗みたいな宗派が創られたと見ているわけである。つまり、真言密教はもう仏教ではない宇宙内部の原理を中心とした非現実的思想のようなものだったので中国人の体質にも合わなく廃れてしまったということである。

日本と中国の現実について日本人は、中国の現実に関心を示さず、部分的に理想化する傾向があった、かえって、中国の現実を理解しようとする姿勢をとらないでいる方が便利であったと分析している。また、中国の現実主義は理念を尊重して共通の一理念に充実しているが、日本は空海式「好いとこ取り」に西欧の合理性も受け入れやすかった柔軟な精神を持っているのが違うとまとめている。¹¹⁾

つまり、「あつけらん日本人」はここにも適用できると思われる。

中国にしてもインドにしても、武力に頼らずして自己を守る方法をいっぱい持っておったわけですね。人文で守ろうとする。 <p. 174>

日本は、武によって統御すると、比較的安定する社会かもしれませんね。いまは馴れぬながら、文によって成立している。馴れないから、何となく日本人は非常に退屈して、「これでいいのだろうか」「もっと緊張がほしい」と考えがちなのかもしれない。 <p. 176>

中国とインドが「文治の国」であるとしたら、日本は「武治の国」であると言っている。そして、日本人は、長い間「武」の統御から安定感が得られる「臨戦態勢の民族」だという辻 悟氏の意見に同意している。さらには、ここでも、昭和十六、十七年から二十年までの武家政治は徳川幕府よりひどい時期だったと批判しているのが分かる。

隣国人の立場で言わせれば、「あっけらかん」日本人がいつも「臨戦態勢」であるから、油断できないと言いたいのだが、果たして過言になるだろうか。

侠とまでいかななくても、友というものが日本にはあまり発達しなかった。友情というのは非常に高級なモラルであるいわれたしたのは、明治以後で、この観念は、中国よりむしろヨーロパからとり入れたモラルですね。 <p. 177>

侠の精神が日本に定着しなかったのは、それがあると、縦割りのできあがった日本の社会がこわれてしまうからでしょう。 <p. 178>

司馬は、「侠」と「友」には程度の差があると言っているが、両方とも一種の感情的平面関係の産物であるとしたら、縦割りの日本人にはそぐわないのは確かであろう。が、彼が言っている「縦割り」は「無層」なものなのか、訊いてみたい。

ともかく日本の社会の中の大抵の社会は臨戦体制的緊張のもとに組織化されているから、一つの異分子があちちを向くと、全組織がガラガラとこわれてしまう。むしろ侠は危険ですね。 <p. 182>

横の關係に歴史と伝統があれば、そうは思わないのですが、その横の關係は存在

しない。日本人は、組織や体制を非常に信頼するようにできているんですね。 <p. 184>

騎馬民族という概念で日本人の一つの輪郭が描けそうですね。 <p. 185>

日本人の縦割りの組織化を騎馬民族の組織の強さで説明できると言っている。そして、日本人は平和の時は派閥 ― 会社組織を含めて ― の組織を、危機の時は全体的臨戦態勢の組織を繰り返して作ってきたと分析しているのが分かる。

特に<p. 184>の引用で目立つのは、司馬は、横の關係の歴史と伝統を認めていないところである。これは彼の歴史観を理解するのに大事なポイントになると考えられる。つまり、縦的歴史観は勝ち組の歴史記録になるわけだから、平面的歴史観を否定しているというのは、彼の歴史観が勝ち組の立場であるのを反証している。従って、<p. 184>の引用はその直接的証拠であると言ってよかろう。

外から日本人を見て、日本は軍国化しているなどといわれるのも無理ないかもしれないな。例えば、日本の大会社に銃と大砲を持たせると、そのまま軍隊になりますね。(中略) 戦闘意欲に旺盛で、そのまま軍事的に転換しても戦争ができそうな気がする。 <p. 187>

外からみれば日本は躍起の形相であるらしい。もともと躍起の形相というのは、日本の宿命のようなもので、(中略) 大人口を養わねばならぬという至上命題は、時には強迫観念になり、時にはそれが、国家行動の正当理由となって、侵略を思い立ったこともあった。

<p. 189>

日本の軍国化を憂慮する外国の立場を全面的に認めたわけではないが、日本はいつも戦闘意欲に旺盛でそのまま軍事的に転換ができそうな組織社会だと断言している。さらに、日本人の「躍起な形相」は宿命的なもので、そのせいで外国への侵略まで繋がったことがあると述べている。つまり、本対談で自ら触れた日本の軍国化の可能性につい

て可否の即答はしていないが、論者は引用文の表現から判断して、その可能性を認めていると考える。

2.8 “サル”が背広を着る時代

— 1970年11月 <富士正晴×司馬遼太郎>

いまの日本社会は、えらい進みすぎて人間の秩序文明というのが崩れとるからね。つまり、その意味では原始時代にもどった。どう考えてもモラルの面では原始時代や。 <p. 201>

江戸時代は違うなあ。ぼくは昔ばなしがきらいやし、江戸文化を何も礼讃するつもりはないけれど、しかし文明が秩序美であるとすれば、日本の文明は江戸時代で極まって、それで終ったのかいなと思うな。

(中略) まあもう一度、鳥や獣を追っていた時代に戻ったというような感じやな。 <p. 203>

上記の引用では、当時の日本社会をモラルが崩れた原始時代に例えている。特に、江戸時代に触れて、「秩序美」の面では日本文明の頂点の時代であったと述べている。しかし論者は、司馬が江戸時代全般に対して好感をもてなかったと思っているから、微妙な違和感を覚えている。

アジアの東のほうの地域でいえば、日本人の混血の割合というものはずいぶん複雑で、だから、日本にはいろんな面白い人間がいるんだが、しかし政治的正義というものに取り憑かれると俺だけが正しいという狂信的グループができあがる。それが群れると集団発狂する。

<p. 210>

戦争に負けた当座はこれから面白い日本人が出てくるだろうと思ったし、そのきざしもたくさんあったけど、しかし負けたことを知らん若い衆が出てきたら、また元通りになってしまった。

<p. 211>

上記で、日本人の血統的多様性を認めて個性(面白い)のある人が多いと言っている。しかし、政治

的正義による集団狂気の危険性も持っていると感じられている。そして、戦争の経験のない新世代に期待感が持てないと失望している。結局、当時の日本は戦前と変わっていないと判断していたのが分かる。

2.9 “人口日本語”の功罪について

— 1971年1月 <桑原武夫×司馬遼太郎>

そういえば明治以前は未然形がありませんね。 <p. 225>

フランス文学者である桑原氏との対談では、言語と標準語を浮き彫りにして話している。端末的な言及ではあるが、明治以前まで日本語に「未然形」がなかった¹²⁾という桑原氏の指摘と司馬の同意には、面白い所がある。言語学的に見た場合、日本語は動詞の時制も簡単なほうで、特に「現在中心」の言葉であると言われている。だから、未来形の「未然形」が発達しなかったのは当然のことであろう。そして、この点は本書で述べられてきた日本人と日本文化の特性とも関係づけられると思う。

まあ標準語で話すと感情のディテールが表現できない。ですから標準語で話をする人が、そらぞらしく見えてしょうない。

(中略) 標準語では論理性だけが厳しい。ですから、生きるとか死ぬとかの問題に直面すると死ぬほうを選ばざるを得ない。生きるということは、非常に猥雑な現実との妥協ですし、そして猥雑な現実のほうで、人生にとって大事だし厳然たるリアリティをふくんでいて、大切だろうと思うのですが、しかし純理論的に生きるか死ぬかをつきつけた場合、妙なことに死ぬほうが正しいということになる。

<p. 233>

ああいうことは、東条さんという人の精神のまずしさより、あの人の日本語に関係があるような気がする。(中略) 東条さんがあの薄っぺらな日本語で喋っていくと、どうしてもあの作戦をやらざるをえないようなかたちになってゆくような気が

します。＜p. 234＞

標準語 ― ここでは、東京語 ― は論理性だけが厳しいから、感情の些細なところまで表せないと言っている。注目すべきなのは、「純理論的に生きるか死ぬかをつきつけた場合、妙なことに死ぬほうが正しいということになる」と言った所である。標準語の制限的役割に関する批判的立場の論旨ではあるが、言語の純論理性の極まりは「死」になってしまうというネガティブな見解は解りづらい。

さらに＜p. 234＞の引用では、東条英機元首相の録音演説に対する感想を述べるのに当たって、彼が東京出身の機械的で堅苦しい標準語をつかっていたから、無惨な軍事作戦まで出来たのが解ると言っている。司馬は一貫して太平洋戦争と当時の軍事政権に批判的だったから、東条英機にも好感はなかったはずだが、言葉遣いをもって戦闘作戦の裏面まで推察するのは、どうしても憶測の面があるように考えられる。

2.10 中国とつきあう法

― 1971年2月 <貝塚茂樹×司馬遼太郎>

われわれが受け取っているものは、儒教的生活形式や背景を抜きにして入ってきていますから、勝手な受け取り方をしているかもしれない。(中略) 日本にくると、人間の生死の問題のようなエッセンスになってしまいますね。

＜pp. 250-251＞

それにもかかわらず王陽明がもてはやされたのは、その思想を生んだ中国官僚社会とは無関係に、王陽明の気分というか生氣というか、そういうものが、日本人の何かと結びついたのでしょうね。

＜pp. 251-252＞

引き続き、中国の儒学と日本の儒学の差について触れている。日本は、儒学本来の生活形式や背景を抜きにして受け入れたし、儒学の中でも形骸化した朱子学の批判から出発した王陽明の影響を強くうけたのだが、それも政治哲学として支配層に「気分と生氣」の変った形として定着したと分

析している。結局、儒学も日本に入ってくる過程の中で、人間の生死の問題のようなエッセンスになったと見ている。

ヨーロッパは武で、中国は文である。

＜p. 253＞

中国語は、言語として論理的ですね。一つレンガを外したら、建物が崩れるような言語でしょう。あの言葉なら、イデオロギーが成立するまいと思っても成立してしまう。＜p. 256＞

前述から中国とインドは「文」の文化であると触れたが、ここではヨーロッパは「武」の文化であると言っている。つまり、日本と西欧は「武」の文化である図式が出来るだけではなく、＜p. 256＞の引用からまとめると、日本は、武の文化でイデオロギーが成立し難い特性を持っていることになる。

孔子のいう礼、中国の文化というか、それが人間成立の基本になっているんでしょね。(中略) 日本人は古来貧乏で、こんにちといえども法人は別として貧乏ですもの、個人の財布をはたいても、中国風の礼などはとてもつくせない。

＜p. 257＞

中国には聖人が出る、本朝には出たことがない、というのが江戸時代の日本の儒者の劣等感だったということですが、なるほど中国では民衆が聖人をつくる気分をもっているわけだなあ。これはどうも驚いたな。毛沢東自身が自分を聖人だと思わなくても、もともと数千人の地の力で、みんなのほうがそう思ってるわけですね。＜p. 259＞

中国文化は孔子の「礼」が人間成立の基本となっているが、日本は、古来から貧乏なせいで中国風の礼は尽くせないと言っている。経済的理由が日本的儒学の要素でもあるというのは司馬のリアリティを反証しているような気がする。また、中国には聖人があって、日本にはないことに感心しているけれども、本書だけの言及を総合しても、

日本に聖人が出にくいのは当然の結果ではないかと思われる。

全部ヨーロッパ風の武の中からでてきたものだから、われわれも武を中心にしないではいけない。

<pp. 259-260>

中国は考えられないくらい広大で、しかもほぼ単一民族でしょう。

<p. 260>

そして、毛沢東以来の中国が従来の「文」から逸脱して「武」に転換しようとしているのではないかと判断しているのが分かる。引用で、中国を「ほぼ単一民族」だと触れているのは、常識的に考えてもおかしいと言わざるを得ない。

日本では、徳川慶喜しかいませんね。慶喜にははっきりと歴史意識があって、歴史の中で演技して、後世の判断はこうだろうと想定して、自分の行動を考えています。

<p. 265>

日本人はかいもく演技能力がありませんね。(中略) まあ日本人は、だいたい口舌の徒だから。 <p. 269>

中国史学者でもある貝塚氏は、中国の政治家は歴史の評価を気にするから、「歴史に対して演技をする」と分析・言及している。これに対して司馬は、日本の場合、歴史認識をもっていたのは徳川慶喜だけだと言い切っているのが分かる。さらに、大体の日本の政治家は「口舌の徒」で外交も下手なので、旧日本軍の陸軍軍人は欧米政治の権謀術数に倣ったことがあったし、当時も一部浪人の外交論にはその傾向があると警鐘を鳴らしている。

特に目につくのは、やはり、歴史認識を持っていた日本の政治家はほとんどいないという所である。周知のように昨今も中国と韓国は日本の政治と政治家に対して「歴史認識」をしつこく問いただしているわけで、司馬の見解を認めるとしたら、外交紛争においての妥協の可能性はもう根本からなくなってしまう結果となる。

2.11 その他

— 1971年3月 <山口 瞳×司馬遼太郎>

1971年4月 <今西錦司×司馬遼太郎>

ぼくはお釈迦さんが好きですから、人類は滅びても、それはやむをえないと思っています。 <p. 310>

今西学によると、人類は賢いようですか。私はある面では救いがたいアホな所があると思うんですが……。 (中略) どうも、この文明といずれは心中というように思えてならない。 <p. 314>

文明をコントロールした唯一の例外は、世界史上、徳川時代しかないんじゃないでしょうか。 <pp. 322>

臓器移植をして3年ほど生命を伸ばしたって、別に味のあることではないとおもいますね。 <p. 324>

偉大なる支配者が現われて、その人物に偉大なる権力を持たせないとできないことかも知れませんな。(中略) こんな文明なんか必要ない、という猛烈な思想の持主が現われる場所というのは、もうアフリカあたりしかありませんでしょう。 <pp. 324>

他に、司馬の人生と人類観が覗かれる所の例である。基本的に庶民志向の仏教派として、人間に対して悲観的なのが分かる。人間はアホで、自分たちが作り上げた文明と心中して滅亡してしまうだろうが、それはやむを得ないと。そして、ギリシャ以来の民主主義ももう電池切れにかかっているようだから、文明の未開拓地であるアフリカみたいな所からの「偉大なる支配者」による「新しい猛烈な思想」を期待するしかないと締め切っている。

特におもしろいのは、世界史上、文明をコントロールした唯一の例が江戸時代だと言っている所である。武器とか文明道具の開発を抑制したからあれだけの平和があったと指摘しているが、彼の判断基準によるとしても、果たして世界史上、文明を制御した例が江戸時代だけだったのかという疑問が残る。中身は違っても、歴史上、270年以上平和な時期はいくらでもあるのではないか。

3. おわりに

以上をまとめると、次の通りである。

日本人・日本社会について、① 日本は伝統的に「無層社会」で「社会的対流のいい」組織社会である。② 日本人は特定の思想に縛られない柔軟性のある「あつけらかん民族」である。③ 日本人は「Mass hysteria 現象」の危険性を持っている。だから、自分は国民的盛り上がりを信用しない。④ 「無抵抗平和主義」「多文化への同化」までも厭わない柔軟な社会を志向すべきである。⑤ 日本は「建て前」と「内実」の二重性を持っている。⑥ (当時の)学生運動は「共同幻想」に駆られて、排他的に「細分化」している。⑦ 日本は「武」の統御から安定感が得られる「臨戦態勢の国」である。⑧ 「侠(友)」の精神は縦割りの日本社会に合わない。⑨ 外国人によく言われる「躍起な形相の日本人」は宿命である。⑩ 日本の政治家は大体「口舌の徒」である。⑪ 相対的思考をする日本人は「一人集中絶対権力への反感」を持っている。⑫ 土地は共有すべきである。⑬ 日本人には騎馬民族系の要素がある。⑭ 日本は頭から単一民族である。⑮ 天皇制は日本最大の発明品である。

歴史・国際関係について、① 江戸時代は「秩序美」の面で日本文明の頂点の時代であって、世界史上、文明をコントロールした唯一の例になる特異な時期であった。② 織田信長の「思想的毒素」が好きで、彼の革新政治には近代的要素がある。③ 伝統的に日本は国際情勢に鈍感で外交も下手だった。太平洋戦争はその一例である。④ 日本は有史以来貧乏であった。⑤ 日本は、徳川慶喜以外に歴史認識を持っていた政治家はいない。⑥ 横の関係に歴史と伝統はない。⑦ 朝鮮は観念的「建て前主義」である。⑧ 中国はほぼ単一民族である。

思想・イデオロギーについて、① 思想はフィクションであり、その寿命は三、四十年ぐらいである。

儒学・仏教について、① 仏教は宗教と思想の生活規範ではなく、芸術の形として導入され定着したので、東南アジア諸国と食い違いがある。② 一神教は日本人に合わないし、自分も違和感を覚え

る。③ 空海は最初から中国の真言密宗に着眼し日本で再編成した。④ 日蓮宗は古代日本人の活発さを煽りだす力がある。⑤ 陽明学も一部支配層に王陽明の「気分」「生氣」だけが日本人の何らかと結びついている。

人間・人類について、① 人間はアホで文明と心中しようとする。② 人類の滅亡はやむを得ない。③ 変化に柔軟であつけらかん日本人の「望ましい舵取り方」は、神に頼るしかない。④ 現代の民主主義はもう電池切れにかかっているから、「偉大なる支配者」による「新しい猛烈な思想」が望まれる。

最後に論者は、司馬が社会の現実・現状について割と客観的に分析し、問題点を提起しているの考えるが、それに関する解決策が見当たらないのを指摘したい。そして、先行研究「対談に見る司馬遼太郎(1)」に引き続き、より明らかになっている司馬の「理想主義的性向」と人間に対する「悲観的認識」を今後の研究課題にして行きたいと思う。

註

- 1) 司馬は『韓のくに紀行』等で朝鮮半島と北九州地域は歴史以前の古代から頻繁に交流していた可能性を述べたことがある。
- 2) 司馬遼太郎 / ドナルド・キーン、『日本人と日本文化』、中公文庫、1972、p. 51
- 3) 全彰煥、「対談に見る司馬遼太郎(1)」、韓国日本近代学会、日本近代学研究、第37輯、2012、8、p. 263
- 4) 「時代細分化」は、論者が司馬研究テーマの一つとして名づけた言葉である。
- 5) 司馬遼太郎、対談集『日本人への遺言』、中公文庫、1999、p. 27
- 6) 司馬遼太郎 / ドナルド・キーン、前掲書、p. 105
- 7) 紀行文『韓のくに紀行』、『耽羅紀行』、『老岐・対馬の道』と対談集『日本人と日本文化』、『日本人への遺言』の他に、同じ時期の雑記帖(副題：一私の雑記帖)『歴史と視点』などに、朝鮮の政治思想は儒学の弊害によって観念化しすぎて停滞してしまったと述べている。

- 8) 司馬遼太郎、『歴史と視点』、新潮社、1974、p. 33
「明治後の日本は無理にむりをかさねている」と言った。
- 9) 司馬遼太郎 / ドナルド・キーン、前掲書、p. 110
- 10) 司馬遼太郎、『日本人を考える』— 司馬遼太郎対談集 —、文春文庫、1978、p. 127
日本歴史の中の四人の政治家として、信長、秀吉、家康と大久保利通を挙げている。
- 11) 司馬遼太郎、前掲書、1978、pp. 171-173
徳川幕府が鎖国にふみきった時、あまりアクシデントもなかったことと、幕末、伊藤博文と井上馨がロンドンへ行く途中、上海で西洋文明をみて、いままでの攘夷論を捨ててしまったことを挙げている。
- 12) ここで言っている「未然形」は「未来形」を意味する。桑原氏の例では、昔は、「あすは雨が降る」と言って、より積極的な表現として「あすは雨が降るはずだ」とか「あすになれば雨が降る」と言っていたそうである。
- 4) 司馬遼太郎、『日本人を考える』— 司馬遼太郎対談集 —、文芸春秋、1978
- 5) 司馬遼太郎、『この国のかたち(一)』、文芸春秋、1990
- 6) 司馬遼太郎、対談集『日本人への遺言』、朝日文庫、1999
- 7) 司馬遼太郎、『耽羅紀行』、朝日文庫、2007
- 8) 司馬遼太郎、『韓のくに紀行』、朝日文庫、2008
- 9) 司馬遼太郎、『壱岐・対馬の道』、朝日文庫、2008
- 10) 中塚 明、『日本と韓国・朝鮮の歴史』、高文研、2002
- 11) 中塚 明、『司馬遼太郎の歴史観』、高文研、2009
- 12) 中村政則、『「坂の上の雲」と司馬史観』、岩波書店、2009

参考文献

<著書>

- 1) 司馬遼太郎 / ドナルド・キーン、『日本人と日本文化』、中公文庫、1972
- 2) 司馬遼太郎、『歴史と視点』— 私の雑記帖 —、新潮文庫、1974
- 3) 司馬遼太郎、『歴史の中の日本』、中公文庫、1976
- 4) 全彰煥、『韓のくに紀行』に見る司馬遼太郎の韓国認識、九州情報大学研究論集、第13巻、2011. 3
- 5) 全彰煥、『耽羅紀行』に見る司馬遼太郎の韓国認識、韓国日本近代学会、日本近代学研究、第33輯、2011. 8
- 6) 全彰煥、『壱岐・対馬の道』に見る司馬遼太郎の朝鮮観、九州情報大学研究論集、第14巻、2012. 3
- 7) 全彰煥、「対談に見る司馬遼太郎(1) — 対談集『日本人と日本文化』『日本人への遺言』に見る司馬遼太郎と司馬史観批判論 —」、韓国日本近代学会、日本近代学研究、第37輯、2012. 8